

信州大学病院ボランティア活動の現状

The present condition of Volunteer action in Shinshu University Hospital

看護部ボランティア委員会：古根 静子・池田てるみ・向山 靖子

信州大学病院ボランティアコーディネーター：根本三代子

要 約

当院で登録されているボランティア46名中実際に活動している人数は21名である。今回、看護婦のボランティアに対する意識調査やボランティア活動報告書等から活動の実態や今後のありかたを検討した。その結果、活動員の殆どは自己の成長、生きがいなど人間としての充実感があり、現状の活動に満足していた。

看護婦の調査からは、ボランティアと医療スタッフとの学習や、組織作りの必要性、増員をしてほしいなど建設的な意見が聞かれる反面、関わりが薄い、どんな活動をしているか知らない、ボランティアを必要としない、活動目的が分からないなど、情報、認識不足としての意見があった。

今後の活動として、看護婦や活動者対象に情報の提供や、教育学習、意見交換の場として交流会の開催、地域への積極的なボランティア募集の宣伝活動を計画した。

キーワード

病院ボランティア ボランティア活動 意識調査

1. はじめに

当院では、1995年6月より、高度先端医療に取り組んでいる病院の運営や機能を市民に広く知ってもらう目的で病院ボランティアを導入した。

現在では、病院の空気を和らげ、患者さんの緊張をほぐしてくれ、外来の窓口で、また一部の病棟でなくてはならない存在として定着してきた。

今回、ボランティア活動の実態や今後のありかたを検討するためアンケート調査とボランティアの活動報告書などから分析を行ったのでその結果を報告する。

2. 方 法

1) H9.5.6 アンケートによる意識調査

看護婦23部署 134名 入院及び外来患者(家族含) 165名

2) H9.4月～7月の4カ月間のボランティアによる活動報告書から活動時間と内容の調査

3) H9.11.12 現在受け入れている7部署の婦長、ボランティア委員との検討会

4) H9.11.15 ボランティア活動者の意識調査 23名

3. 結 果

1) 看護婦の意識調査ではアンケートを実施した90%の看護婦が今後もボランティアを病棟で受け入れたいと考えていた(図1)。また、ボランティアをどのようにうけとめているかという質問

では、ボランティアと医療スタッフとの学習や組織作りの場が必要、いま活動中のボランティアが患者の精神的慰安に役立っているから増員してほしいなどの建設的な意見が聞かれている。しかしその反面、存在が薄い、あまり関わりがない、何の目的で活動しているのか分からない、ボランティアを必要と感ぜないなどボランティアに対する認識が薄く、情報、宣伝不足として考えさせられる意見が得られた。

患者への質問では入院、外来ともに約半数の患者が当病院の活動を知っているが、実際にお世話になったことがあるのは10～20%のみである(図2)。次にボランティアをしたいと思いますかの質問では、入院患者からは約半数、外来通院者では10～20%がボランティアをしたいと考えており、入院患者のほうが関心を持っている事が伺える。ボランティアの経験がありますかの質問においては殆どの方が経験がないと答えている(図3)。

ボランティアの方にしてもらいたい内容では、看護婦、患者共に精神的慰安につながる話し相手、事務手続き、案内が圧倒的に多かった(図4)。

- 2) 活動報告書の分析では、当院でのボランティアの登録者数は46名であり、その平均年齢は60.8才である。現時点での実際の活動者は21名である。活動日数は1ヶ月平均外来では20日間、病棟では15日間である。活動時間は外来では1日平均5.7時間、病棟では3時間であった。活動内容として外来では案内業務、車椅子補助が上位を占めている。病棟においては、話し相手、マッサージ、送迎、食事介助などの生活援助が上位を占めていた(図5)。
- 3) 受入れ側の婦長たちとの検討会で話し合われた事は、ボランティアの多くはその活動に自信を持つまでには3ヶ月を要した事から、ボランティアの有効な活動を支援するために当初3ヶ月は心配りが必要であるとの見解であった。
- 4) ボランティア活動者の意識調査においては、活動していて良かった点は、患者さんから感謝された時、自分でも人に役立つと自信が持てた、生活に張りができたなどの意見があった。現在の活動場所や内容に対して殆どが現状に満足している意見であった。

5. 考 察

病院ボランティアはただ単に医療の限界を補う存在ではなく、独自の存在意識を持って社会的ボランティアとして成長していくのを医療者は援助していく必要がある。一人ひとりのもつ個性に合わせての適性配置は、個人のやる気を高めることやグループの活動の活性化に影響する。奉仕内容が各々に合うと幸いだ人がにより適さないこともある。この適性配置には個々と話し合い一緒に考える姿勢を持って対応する必要がある。互いに相乗効果を生み出すことができるようまた、看護婦の一人々が関わりをもてるよう何をすべきか考えてみたい。当院で実際に活動しているボランティアの多くは自己の成長、生きがいなど人間としての充実感を味わっていると答えているが、看護婦の意識調査からは何の目的で活動しているのか分からない、関わりが薄いので分からないなどの意見が多く、看護婦自身がボランティア精神に対し関心が低く理解が乏しいことが分かった。ここで問題点をまとめてみると、1) 特に病棟内で活動しているボランティアはどのような活動をしたいのか看護婦は知らないためボランティア活動者に有効な働きかけができていない。2) お互いの意見交換や交流を持つ機会がないから反応が分からない。3) 看護婦が依頼して活動してもらう程のボランティアの人数の確保ができていないなどであった。そこで1) に対して受け入れている病棟

では予めその計画表にそって患者の援助活動を計画出来ることを目的として、毎月活動の主旨を記入したボランティア活動表をカレンダー様式にして各部署に配布した。2) に対して引き続きボランティアの教育や学習、意見交換の場として3カ月に1回の割合で交流会を開催し参加形態は今後検討していくこととした。3) に対しては院内を始め各地域へ新聞やテレビなどのマスメディアやポスターなど、ボランティア募集と宣伝活動を引き続き行っていく必要がある。

現在の当院のボランティアの平均年齢が60.8才であり長続きできるよう援助するためにもより細やかな調整が必要であると思われる。また学生や若い人がボランティアに登録しているが長続きしない現状もある。今後の活動の種類としては短期間の取り組みでできるイベント活動や特技に合わせた活動、たとえば植木、温室の手入れ、移動図書館の管理などを加えることも検討している。ボランティア希望者が活動までをどのような準備が必要か確認する事で身近な人へのお誘いができるように図式化した手順を作成した(図6)。

6. おわりに

無報酬であるボランティアの人々が喜びを持って活動されている姿は職員の仕事に対する姿勢への刺激ともなる。この根を枯らさず大きく育てて行けるよう、また、患者さんが満足して頂ける医療が提供できるよう今後も努力していきたい。

参考文献

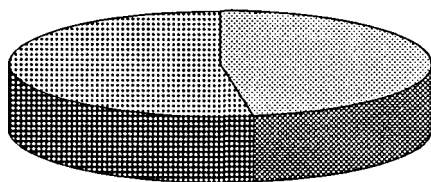
- 1) 新谷弘子：病院ボランティアとは；看護学雑誌， P 602-605,1994.
- 2) 片山蘭子：21世紀に向けてのボランティアのあり方，看護学雑誌， P 614-618,1994.
- 3) 松本みよ子：病院ボランティアの目指すもの，看護展望， P 306-308,1997.

図 1

現在ボランティアを受け入れていますか

現在受けていない
59%

現在受けている
41%



今後も受け入れたいですか

受けたくない 6%

受けたい
94%

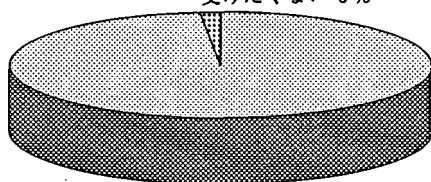
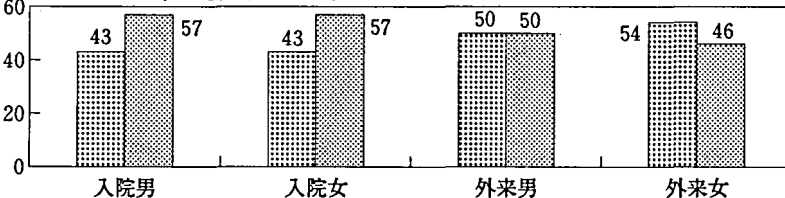


図 2

ボランティアを知っていますか

(%)



お世話になったことがありますか

(%)

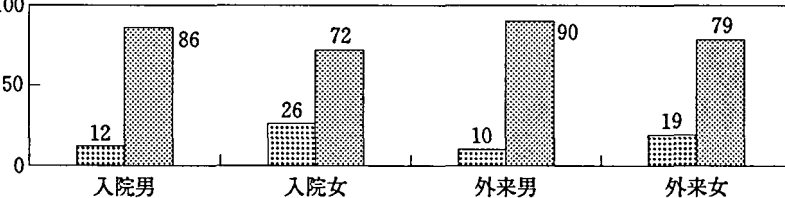
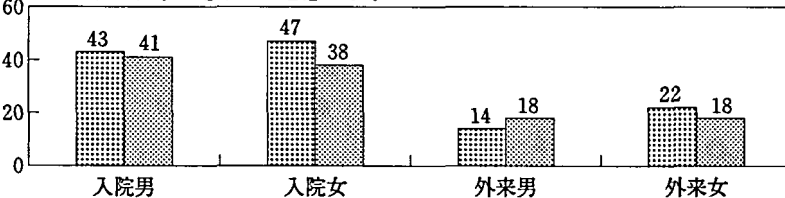


図 3

ボランティアをしたいと思いますか

(%)



ボランティアの経験はありますか

(%)

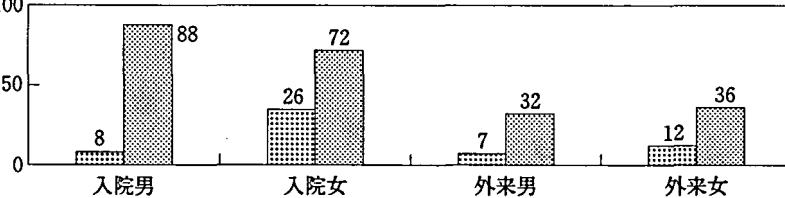


図4

ボランティアにしてみたい内容

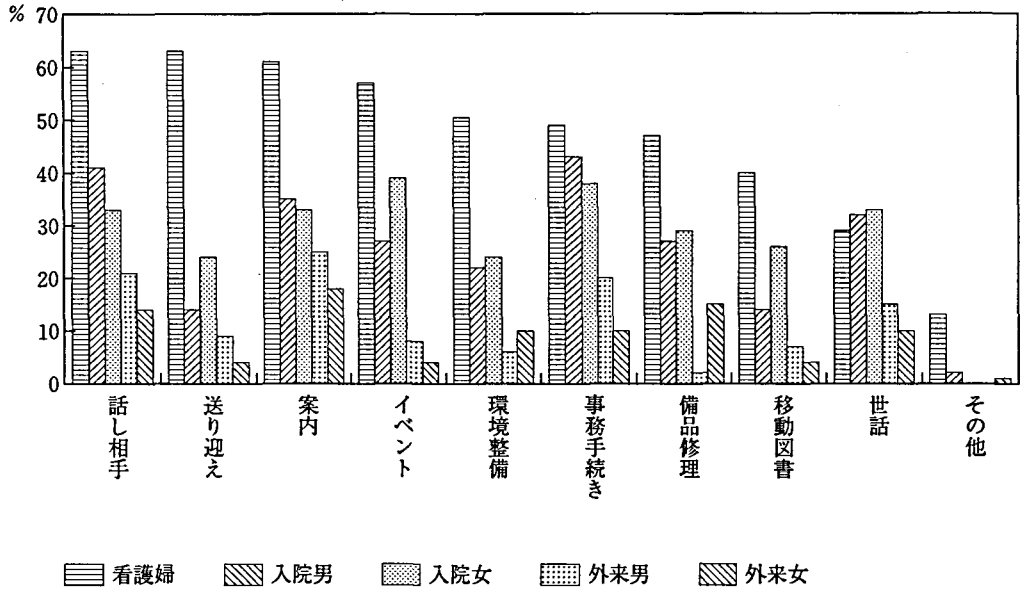
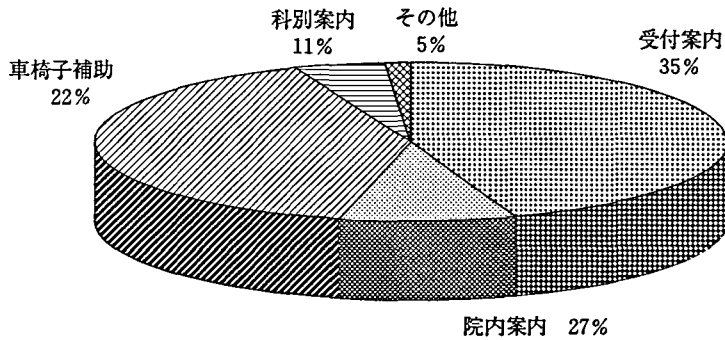


図5

外来ボランティア活動内容



病棟ボランティア活動内容

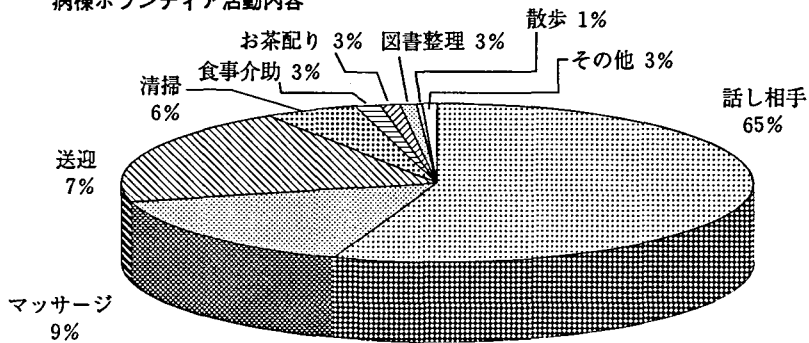


図6

病院ボランティア活動までの流れ

ボランティア希望者

